
ライバルは婚約者！？

奈津美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ライバルは婚約者！？

【Nコード】

N9700A

【作者名】

奈津美

【あらすじ】

この話は「ライバルは中学生！？」の続編です。平×和です。ある日、平次に婚約者が現れて……。

*** 0 深夜の作戦（前書き）**

お待ちしていたみなさん。
新連載です^^

* 0 深夜の作戦

俺の名前は服部平次。

西の高校生探偵や。

工藤とねえーちゃんは見事ラブラブになったなあ。

ん？俺の方はって・・・。

和葉は俺の子分や！！

和葉つちゅーのは遠山和葉。俺の幼なじみや。

まあ、後の登場人物は・・・。

俺のオカンの服部静香。

オヤジの服部平蔵。

まあ、こんなトコやな。

じゃあ、本編の始まりやで。

もう夜遅い。

しかし、服部家からは話し声がした。

「あなた、話したいことがあります。」

「なんや、静。遠山と遠山さんも連れてきよって。」

「平次と和葉ちゃんのことなんやけど……。」

静香は長々と話した。

十分後……。

「ああ、それはいいんとちゃう？」

「私も賛成や。」

「遠山さんありがとお。あなたは？」

「しゃーない、俺も協力したる。」

「ありがとお。ほな、作戦は決行します。」

深夜の話し合いで決まった作戦。

この作戦とは

いつたいたんなのか……。

それはこれからのお楽しみ……。

* 0 深夜の作戦（後書き）

こんにちは、奈津美です。

新連載が始まりました！。

ところで・・・和葉のお母さんって・・・？

まあ、細かいところはおいといてと（笑

評価やアドバイス、感想等をよろしくお願いしますww

***1 「婚約者やて!?!」(前書き)**

「ライバルは中学生!?!」より文が短い点を反省。

* 1 「婚約者やて!？」

八月の上旬。

俺は家でのんびりしてた。

ベットでごろごろしてるのもつまらんなあ。

本読むのにも飽きてしもうた・・・。

寝てしまおうか・・・。

トントン

俺の部屋を叩く音。

俺は、このドアを開けなきゃよかったと後悔した。

「和葉か？」

ガチャ

「平次、ちよつとええ？」

「オカン? なんや急に。」

「平次に紹介したい人がいるんやけど。」

「誰や?」

「だから、今から紹介するって言ってるやろ。」

俺はしゃーないからオカンについてった。

なんかいやな予感するんやけど……。

ガラッ

「あら？あなたが服部平次君かしら？」

「は、はぁ……。」

座っていたのは着物の女やった。

髪はロングでかんざししてた。

俺より年上っぽい。

で……誰やこいつ？

「平次、この方は上野くれはさん。」

「くれはですわ。年は20です。」

で、なんなんや……。

こいつは俺と関係あんのか？

「オカン、用はこれだけか？」

「平次、今日から上野さんはあなたのフィアンセよ。」

「フィアンセ？」

「私は、平次さんの婚約者ですわ。」

「婚約者やて！」

ポトツ

何かが落ちる音がした。

俺は、まさかと思い後ろを見たんや。

「……か、和葉。」

和葉がびつくりした顔して立ってた。

「へ……平次。」

「あら、和葉ちゃんいらっしやい。」

「あ……あ……。」

和葉は驚いていた。

震えてた気もした。

その場には沈黙が流れてしまった。

床には和葉が落とした

クッキーが散らばっていた・・・。

＊１ 「婚約者やて!？」（後書き）

新一「みなさん、お久しぶりです。」

作者「今日のゲストは新一です!」

新一「服部に婚約者かぁ・・・。」

作者「しかも年上ですよ。」

新一「前回の話しあいと関係でも?」

作者「さぁー。」

新一「気になるじゃねーか!」

作者「ではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

***2 「逃げるで、和葉！」（前書き）**

タイトルは全部大阪弁にします^^

＊2 「逃げるで、和葉！」

俺は上野さんの方を見た。

上野さんはニッコリした。

俺はこの雰囲気の中

じっとしてられなかった。

「オカン、すまん。俺は婚約者なんていらん。」

「ちよつと平次。」

「すまん、上野さん。俺は婚約者なんていらんのや。」

「平次さん……。」

上野さんに会釈をしてから

俺は和葉を引つ張った。

「逃げるで、和葉！」

「ちよつ！平次！！」

俺は、和葉を連れてその場から逃げたんや。

とにかく逃げた。

「くれはちゃん、ありがとねえ。上手くいくかもしれへん。」

「そんなあ、静香さんの作戦のおかげやないですか。」

「ただなあ、平次は恋愛には鈍感なんや。」

「そうやの？じゃあもう少し手伝わなアカンなあ。」

「……」

俺達はとりあえずヒマワリの園に逃げた。

珍しく人がいてへんから奥まで逃げた。

「平次、婚約者ってなんなん？」

「知らん、オカンが勝手にやったんや。」

「ハアハア、疲れたんやけど。」

「すまん、ほなこの前のベンチに行こうや。」

俺達はベンチに向かった。

「着いたで……。」

「ハアー疲れた。」

とりあえず、座った。

サンサンと照りつける太陽。

地獄のような暑さだった。

「平次は、あの人のことどう思ってるんや？」

「どうって・・・別にどーもせん。」

「ホンマに・・・？」

「あたりまえやないか。いきなり婚約者って言われてもなあ。」

「結奈ちゃんよりタチ悪そうやで。」

「そやな・・・。」

上野さんがいきなり現れた理由とか

細かいことはよー分からんけど

俺は婚約する気いなんてこれっぽっちもない。

「平次は・・・誰が好きなん？」

「へっ？聞こえへん。」

「・・・なんでもない。」

「そうなん？ならええけど。」

なんだか息苦しかった。

ドキドキもした。

これが恋なんやろーか……。。

そやかて、子分に恋なんてなあ……。。

俺はこれからどうしようか考えた。

ただ、家には帰りとお無かった。

和葉ともう少しいてもいいかなあ。

なんて考えてもみた。

「和葉、さつきクッキー持ってきてたやろ。」

「えっ!？」

平次……。気づいてたん？

けど……。床に落としてしもうた。

「また……。作れや。」

「う、うん。」

「お前のクッキー食べてくれる奴おらんと思うしなあ。」

「は、はあ！？」

「何が入ってるか分からんやろ。」

「平次のアホー！！」

バシッ

「平手打ちかいな・・・。」

平次の頬には

和葉の手の跡がくつきり残っていた・・・。

*2 「逃げるで、和葉！」（後書き）

作者「新一に続くゲストは・・・？」

快斗「快斗です。」

作者「初登場だねー。」

快斗「俺も出るのか？」

作者「いや、出さないよ。」

快斗「！？」

作者「あのね、本編で出せないからせめてここでみたいな」

快斗「そんな・・・。」

作者「ま、まあどんまい！じゃあいつもの決め台詞！」

二人「真実はいつも一つ！」

こんにちは、奈津美です。

少し、小説書くのに慣れたかな？

私には尊敬してる先生が何人かいるのですが。

その人のように書くのは無理ですねー。

朧月さんやユーリさん達にこの作品を読んでもらい

真に光栄です

評価やアドバイスや感想等をよろしくおねがいします。

おもしろさに欠ける小説ですが

どうぞお読み下さい^^

***3 「助っ人からの電話やで」(前書き)**

タイトル長くてすみません^^;

＊3 「助っ人からの電話やで」

平次。

ずっと気になってたんやけど

平次の好きな人って誰なん？

初恋の人が私やとしても・・・。

今は分からないやないか。

ブルルルルル

誰もいないヒマワリの園に

平次の携帯音が鳴り響いた。

「はい、服部やけど。」

『服部、俺だよ俺。』

「おおー！工藤やないか！」

『実はさ、お前に渡したい物があるんだ。』

工藤・・・！！

「そーや！またそっち行ってもええか？」

『はああ!?!』

「ちょっと、平次!それは工藤君に迷惑やる!」

「かまへんかまへん。」

『かまへんじゃねーよ。』

東京に逃げれば婚約者とか気にせず過ごせるやないか。

「工藤、訳ありなんや!頼む!」

『・・・しゃーねーなあ。』

「サンキューな、工藤!」

『で、いつ?』

「今日や。」

『今日だとおおおお!!!』

なんや、工藤。

そんなに驚くことないやないか。

そりゃ、少し急やけど・・・。

「平次、かわつてえや。」

「ほな、和葉に代わるで。」

『あ、ああ。』

「もしもし、工藤君。ごめんなあ、急すぎやね。」

『ホントだよ……。』

「実はな、平次に婚約者ができてしもうた。」

『なに！服部には和葉ちゃんがいるじゃねーか。』

「ホンマやで、おばちゃんが平次に紹介したんや！」

『あちゃー……。だから服部がこっちに来たかったのか。』

「私……。どないしょ。」

『……。しょうがない、俺と蘭がそっちに行くよ。』

「えっ？なんでや？」

『服部のお母さんを説得してやるよ。和葉ちゃんがいるんだって。』

「ありがとお……。」

なんや、和葉のやつ

優しい声出しおって……。

相手は工藤やぞ！

「和葉、代われや。」

「う、うん。」

『もしもし？』

「こらあ！工藤！今何話してたんや！」

『何って、俺が大阪に行くって……。』

「・・・ホンマか？」

『あ、ああ。』

「分かった、じゃあ切るで。」

『お、おい！』

ピッ

「なんや？平次……。』

「なんでもあらへん！」

さらに暑くなっただろう。

まだ15：00だ。

サンサンと照りつける太陽

空には入道雲が出ていた。

雷でもなるのやろうか？

「なあ、平次。」

「なんや？」

「寝てもええ？疲れてしもうた。」

この暑さの中

じっとしてるのもつらいやろ。

「ええよ、肩貸すで。」

「ありがとお・・・。」

和葉は俺の肩によりかかった。

そのまま寝てしもうた。

和葉は・・・どう思ってたんのやろか。

和葉の初恋の人って誰なんやろか。

俺は地獄のような暑さの中

いろんなことを考えてた。

横で和葉は

「・・・平次。」

と呟いていた。

流れる雲を見ていたら

これから不安になってきた。

＊3 「助っ人からの電話やで」（後書き）

こんにちは、奈津美です。

明日は体育祭です^^

中学二年生になってから忙しくなりました。
もつと前から小説書けばよかったなあ。

なんて、後悔^^；

尊敬している先生に評価をいただけるのは
本当に嬉しいですね。

もちろん、みなさんの評価も嬉しいです。

ジェーンさんの小説が大好きなんですが・・・。
最近見てません・・・（'・'・'・'）

小説って書くのも読むのも楽しいですねえ。

作者「今日のゲストは・・・。」

歩美「歩美です！」

作者「おお！番外編で活躍したねえ^^」

歩美「うん！」

作者「光彦とはどう？」

歩美「ナカヨシだよ。」

作者「まだだめかあ・・・じゃあいつもの決め台詞！」

二人「真実はいつも一つ！」

*** 4 「寝言やないか」(前書き)**

タイトル考えるのに二分消費(笑

* 4 「寝言やないか」

まだ16:00だ。

地獄のような暑さは変わらなかった。

しかし、空は変わった。

黒い雲が集まった。

今にでも雨が降りそうな感じや。

「和葉、起きろや。」

「ん……。」

なんやコイツ……起きないやないか。

「平次……。」

また俺の名前呼んでるやないか……。

「あんたの好きな人は……誰なん？」

「和葉!？」

「スースー。」

寝言やないか……。

焦ったでえ……。

ん？なんで焦るんや？

好きな人なんていないやないか。

で、和葉を起こさなあかなあ。

けど、和葉の奴気持ちよさそおに寝てるんや。

起こすのも気が引ける。

「……しゃーないなあ。」

俺は和葉を負ぶった。

起こさないようそつと家に帰ろうとした。

家に帰りたくはないが、しょうがなかった。

ポツッポツッ

「ん？」

顔に落ちる雫。

雨の降り始めだった。

ザーザー

「げっ・・・ドシャ降りや。」

俺は着てた上着を和葉に掛けた。

風邪引かれたら困るからな。

「つくしゅん！」

あかん・・・早お帰らなあかん。

俺が風邪引いてまう。

俺は水溜りなんて気にせず走った。

ガラッ

玄関の戸を開ける。

「オカン、タオル持ってきてえや！」

俺は和葉を降ろした。

「ん・・・平次？」

「アホ、お前どんだけ寝てるんや。」

「ごめんなあ、疲れてしもって・・・ん？」

「どうしたんや？」

「平次が運んでくれたん？」

「ああ、おんぶしたんや。」

「ありがとお．．．。」

和葉の顔が綺麗だったから

俺はなんにも言わなかった。

タッタッタ

走ってくる音やな。

きつとオカンが．．．。

「平次さん、タオルですわ。」

「上野さん！？」

なんで．．．なんで．．．

ここにいるんやー！！

「あつ、和葉ちゃんもどうぞ。」

「ありがとお．．．。」

「じゃあ、私は料理の手伝いがあるので。」

上野さんは台所に向かった。

「平次、あの人いい人やなあ。」

「ん？」

「だって、タオルくれたやないか。」

「タオルくらい普通やる？」

「けど、私にもくれたやん。」

「ま、まあそやけど・・・。」

いい人とか悪い人とかいう問題やないねん。

婚約者つーのが問題や。

「ハアー。」

なんか・・・体が熱い。

目が回りそうや・・・。

グラッ

あ・・・かん・・・。

ボタンッ！

「平次!!」

俺はそのまま気を失ってしもうたんや。

和葉の声が聞こえたけど

まぶたが重くて

開けられへんねや……。

*4 「寝言やないか」(後書き)

作者「今日のゲストは……。」

園子「園子ちゃんです!」

作者「ではご感想を。」

園子「こっちもまたじれったいわねえ……。」

作者「そーですね!」

園子「服部君かっこいいわねえ……。」

作者「色黒好きめ……。」

園子「もちろん真さんの方が好き!!」

作者「はぁ……それではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

*** 5 「風邪引いてもうた」(前書き)**

平次が風邪引くのか・・・？

* 5 「風邪引いてしもうた」

まだ目が回る……。

あかん……熱い。

寒いけど熱いんや……。

助けてくれや……。

「平次……平気？」

「ん……。」

目が覚めた。

目の前には心配そうな顔してる和葉がいた。

「う……。」

俺は体を起こそうとした。

「まだ起きたらアカン！」

「な……んでや。」

「平次、熱がまだ下がってないんよ。」

「何度あるんや……？」

喉は痛くない。

しかし、熱い。

そして、寒い。

頭が痛い……。

「38度5分やで、だから無理したらアカン。」

「そか……。」

「ちよつと、待っててな。」

バタンッ

和葉は部屋から出て行った。

服部は考えた。

工藤が来る前には治さなアカンな。

それと、悪いけど

上野さんには諦めてもらわなあかん。

俺には……。

和葉っちゅー子分がいる。

婚約者なんていらん・・・。

いらんねや・・・。

アカン、頭痛いんやつた・・・。

ボタンッ

「平次、りんごやで。おいしできつと・・・。」

平次はボーっとしていた。

風邪を引いてても

平次の目の輝きは変わらなかった。

キラキラしてる・・・。

「おっ、りんごかぁ。いただきます。」

「そや、早おー食べて元気になってや。」

「サンキューな、和葉。」

「礼なんていい、元気になってくれればええ。」

おれはりんごを食べた。

シャリシャリ

「うまいなあ……。」

トントン

「オカン？」

ガチャ……。

「アホは風邪引かへんのかなあ。」

「親父!？」

「平次のお父ちゃん!」

親父が俺の部屋に入ってくるなんて

何年ぶりや……。

「和葉ちゃん、風邪引いてないか？」

「平気です。」

「そうか、そらよかったなあ。」

「よくないやろ! 息子が風邪引いたんやで!」

「ああ、まあ早く治せや。」

「なんや……それ。」

キツネ目親父め……。

「和葉ちゃん、悪いけど外出してもらってええか？」

「あつ、はい。」

「ん？なんでや？」

「じゃあ、ごゆつくり……。」

和葉は足音立てずに部屋から出た。

平次の部屋には

平蔵と平次の

二人つきりになった……。

ザーザー

外はまだドシャ降りだった。

外はとても暗く

空はとても黒かった……。

* 5 「風邪引いてしもうた」(後書き)

作者「今日のゲストは……!!」

英理「私だけど?」

作者「小五郎さんに、一言!」

英理「まあ、最近頑張ってるみたいね。」

作者「ゴロちゃん元気ですか?」

英理「ええ、とても元気よ。」

作者「ゴゴロウのゴロですもんね^^」

英理「////////」

作者「ではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

奈津美です。

この話が完結したら何を書こうか悩んでいます。

ってまだまだ完結しそうにない^^;

コx哀でも書こうかなあ……。

ハッピーエンドにはさせないけど(* m (ププッ

そーいえば、小五郎x英理 を書いてと言われたことも

難しいから無理かも……。

ああ……どうしよう!

あと、評価よろしく願います^^

*** 6 「親父の怒りや」(前書き)**

大阪弁のタイトルってのも難しい・・・。

* 6 「親父の怒りや」

親父と二人って

なんか休めないというか・・・。

なんというか・・・。

「なあ、平次。」

「なんや・・・？」

「和葉ちゃんとはどうなんだ？」

「はあ？」

親父がこんなこと言うなんて・・・。

頭がいかれてしもつたんとちゃう？

大丈夫やるか・・・。

「どうって・・・和葉は俺の子分や。」

「お前、それ本気で言ってるのか？」

「本気やで？」

バンッ

「っ!？」

親父はいきなり俺を殴った。

「アホぬかせ!和葉ちゃんを幸せにできると思ったのに……。」

「親父……?」

「もうええ。お前はくれはさんとお幸せに。」

「おい、親父。」

「なんや。」

「上野さんって誰や?」

「だからお前の婚約者や!」

「そーいうことやない!どっから現れたんや!」

「俺の親友の娘や。」

「そうやったん!？」

どっかのだれかさんかと思ってた。

「これから同居やで。」

「……へっ?」

親父の親友の娘からやといって……。

婚約する気はない……。

ないんや……。

『平次……。』

和葉の声が聞こえる……。

和葉……お前は

俺のこと

どう思っとなのや？

俺は……

和葉の方がええ。

上野さんがいくら美人やからって……

和葉の方がええ。

これって……なんや？

和葉は子分なんか？

いや……それ以上や。

子分じゃないんや・・・。

「平次・・・・・・・・。」

気いついたら俺はベットで寝てた。

さっきより少し楽や・・・。

「か・・和葉。」

「さっきより熱下がったんよ。」

「そうか・・・・・・・・。」

「けど、まだ七度八分あるから寝てなアカンよ。」

「分かつとる。」

「ならええけど。」

「和葉・・・・・・・・。」

「なんや？」

「サンキューな・・・・・・・・。」

「平次・・・・・・・・。」

私は気づいた。

平次の口の横に

殴られた痕があったんや。

きつと・・・お父ちゃんに殴られたんやと思う。

なんの話してか分からん。

ただ・・・平次の目は

いつもよりキラキラしてなかった。

トントン

「はい？」

ガチャ

「平次さん・・・平気ですか？」

上野さんが部屋に入って来た。

ピカッ

窓の外が光った。

雷や・・・。

この雷はなにを表しているんやろうか・・・。

* 6 「親父の怒りや」(後書き)

奈津美です。

最近はいろいろと忙しいです^^;

来週はなかなカ投稿できないカもしれません^^;

ごめんなさい!

まだまだ完結しません・・・。

はうー。

評価やアドバイスを下さい^^

では^^

*7 「キスやてー！」（前書き）

私ってキスねたが好きなのかなあ・・・。

*7 「キスやてー!」

「平次さん、熱下がりませんねえ。」

「は、はあ。」

「大丈夫です、平次ならすぐ直るから。」

「けど、心配でしょう?」

「ま、まあ……。」

この人……凄い。

話すだけで疲れるぞ……。

「うーん……おかゆ作ってきますね。」

「かまわんといて下さい。」

「いいんです、あなたのためですから。」

そう言って部屋を出て行った。

「……疲れた。」

「私もや。」

和葉に言うべきやな。

同居のこと……。

けど、和葉はどういう反応するんやろか。

「あんな……和葉。」

「なんや？」

「実は……上野さんと同居することになってしまった。」

「ええええええええええ!!」

予想以上の驚きっぷりだった。

「いやや……。」

「和葉……？」

「いやや！同居なんていやや……。」

「和葉……。」

俺かて、好きで同居する訳でもないねん。
する気もないねん。

「平次……同居する気ないよなあ。」

「あたりまえやないか。」

「いやや・・・平次があの人と付き合ってもうたら。」

「ありえへん・・・。」

ん？

なんで和葉は嫌がつとんのや？

・・・??

ガチャ

「平次さん、おかゆですわ。」

「どうも・・・。」

和葉はおかゆを食べるためのれんげを素早く取った。

「フーフー。」

和葉はおかゆをれんげで取って、息で冷ます。

「平次、はいアーン。」

俺は恥ずかしながらも口を開けた。

「おいしいですか・・・？」

「おいしいです。」

「そうですかぁ。」

平次はペロリと全部たいらげた。

それから体温計で熱を計る。

ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。ピ。

「あ、鳴った。」

「ちょっと、見せてーや。」

熱は三十七度五分だった。

「少し下がったで、よかったあ。」

「サンキューな。」

「ええって。」

「上野さんもおおきに。」

「いいえ。」

俺は横になった。

少しでも早く熱を下げなアカンからな。

「平次さん……。」

「なんです?」

「…………。」

チュッ

「…………。」

「早く……治して下さいね。」

上野さんはそう言うてから

部屋を後にした…………。

「平次…………。」

和葉は震えてた。

「今、何したん…………?」

「おでこに…………キスした。」

「誰が?」

「くれはさんが…………。」

「…………。」

キス…………?

上野さんが・・・？

俺に・・・

キス。

「キスやてー！！！！」

俺は驚きが隠せなかった。

バーン！

雷がまた落ちた。

嵐の予感や・・・。

*7 「キスやてー!」(後書き)

作者「みなさん、すいません。」

和葉「なに謝ってん?」

作者「なんかまたキスねたになっちゃってしまつて。」

和葉「そやで、全く・・・。」

作者「いや、あなたが怒るといったらキスカな?」

和葉「う・・・。」

作者「ではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

*** 8 「嵐や・・・」(前書き)**

最近時間が無いよお。

*** 8 「嵐や・・・」**

「平次・・・・・・・・。」

「和葉、俺・・・怒ったで!!」

しかし、和葉の怒りは俺を上回っていたのだ。

「くれはさんめ~~~~!!」

ボタンッ!!

和葉は勢いよくドアを閉めて出ていった。

「嵐や・・・・・・・・。」

~~~~~

ガチャガチャ

くれはは台所で皿洗いをしていた。

「私も手伝ってええか!」

「あら、和葉ちゃん。いいわよ。」

なにが”いいわよ”や!

少しばかり女の子らしいからって

調子に乗んねや！

ガチャガチャ

「ねえ、和葉ちゃん。」

「なんです？」

「平次さんのこと・・・好きですか？」

「~~~~~!!」

なんやこの人・・・。

笑顔でこんなこと聞くなんて！

「好きやったら？」

「邪魔してるかなって。」

もうめっちゃ邪魔や！

「ええか、今日会った人にイキナリキスはアカンで！」

「おでこでしたけど？」

おでこやてキスには代わりへん！

「あんなあ・・・キスはキスやないか。」

「そうですけど、あれは私の家のおまじないです。」

「おまじないやて　　!？」

キスがおまじない？

ホンマかいな・・・。

「お母様が教えてくれました。」

「・・・・・・・・。」

「私が風邪引くと、おでこにキスして早く治れって言うてくれました。」

「けどなあ!」

「お母様は・・・もうこの世にはいません。」

「っ!?!」

「しかし、お母様に教えてもらったおまじないは忘れられません。」

いくら・・・おまじないかて

キスはいやや・・・・・・・・。

平次が好きやから・・・・・・・・。

今は片思いかもしれへんけど

いつかは……。

「ねえ、和葉ちゃん。」

「はい？」

「あなたもやってみたらどうですか？」

「~~~~!!」

できる訳ないやろっ！

アホか……。

「私、平次さんのこともっと知りたいです。」

「くれはさん……。」

「そして、好きになりたい。」

「っ……。。。」

「結婚したいです……。」

「私は認めへんからなっ！」

私はその場から逃げ出した。



平次を連れて行かれそうだった。

くれはさんが、平次と結婚してしもうたら

ここからいなくなっちゃうかもしれない！

いくら平次が反対したって

ムリやりってこともあるかもしれへん！

い  
ち  
ち  
・  
・  
・  
・  
。

ずっとここにいてや……

- 平次
- ・
- ・
- ・
- ・
- 

$$\begin{array}{c} \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \\ \int \\ \cdot \end{array}$$

「くれはちゃん、お疲れさん。」

「なんや平蔵さんかあ。」

「あのアホ……。」

「平次君のことですか？」

「そやで、あいつホンマに鈍いんや。」

「あなたにそっくりや……。」

「静!？」

「ホンマやる・・・。」

「俺は鈍くなんかあらへん!」

「アハハハハ。」

〕・・・〕・・・〕・・・

私はおもいつきりドアを開けた。

「なんや・・・和葉かつ・・・。」

私は平次に抱きついた。

平次の胸で泣いた。

「平次・・・どっかいつちやいややで。」

「和葉!？」

「ずっと・・・ここにいてや。」

和葉はずっと泣いた。

「和葉・・・。」

よかった・・・。

平次がここにいて

ホンマによかった……。。

バーンッ！

また雷が落ちた。

「っ！」

イキナリ真っ暗になった。

停電したんやろか。

けど、和葉は

俺の胸で泣きつづけた。

ずっと……。ずっと……。。

**\* 8 「嵐や・・・」(後書き)**

本当に時間が無いです^^;  
テスト前ですし^^;  
あとがき書けなくなるかも^^;  
人(。。)ごめんなさい。

\* 9 「口移しやて！」（前書き）

またまたキスねた・・・^^；

\* 9 「口移しやて！」

ホンマに真っ暗やった。

いつの間に雨はやんでいた。

真っ黒な雲も無くなって

月が顔を出した。

けど、家は真っ暗や。

ブレーカーでも壊れたんやろか……。

「なあ……平次。」

やっと和葉が喋った。

「なんや……？」

「ここにいて欲しいんや……。」

「分かったから……。」

息苦しい。

心臓がバクバクいっとる。

和葉が近くにいるからか……？

子分やなかったらなんや？

兄弟か………？

いや、兄弟やったらドキドキせーへんやろ。

アカン………。

俺……和葉のこと？

違う………。

きつと………。

きつと………。

「……くれはさんは平次のこともと知りたいつて言ってる。」

「えっ？」

「けど、知って欲しくない。」

「………。」

「くれはさんと平次が仲良くするのはいやや。」

「和葉………。」

そや………。

俺やって・・・。

「あんな・・・和葉。」

ピンポーン！

なんや・・・タイミング悪い訪問者やなあ。

「はいはい、和葉ちよつと待っててや。」

俺は部屋を出た。

廊下も真っ暗でほとんど何も見えなかった。

「はい？」

「服部か？」

俺は戸を開けた。

「工藤！ねーちゃん！」

「よお、真っ暗だったから寝てるかと思ったぜ。」

「どうして真っ暗なの？」

「分からへん、さっきの雷が原因やと思っくんやけどなあ。」

「そーいえば雷鳴ってたなあ。」



「和葉ちゃんは？」

「俺の部屋にいます・・・。」

アカン・・・。

またフラフラしてきた。

目が・・・霞む。

ボタンッ！！

「服部！？」

「服部君！！」

ガチャ・・・。

服部の部屋から誰かが出てきた。

「・・・あれ？工藤君と蘭ちゃん・・・！！平次！！」

平次は倒れてしまった。

熱があるのに寝てなかったからだろう。

新一は平次をベットまで運んだ。

蘭は静香に氷枕を貰ってきた。

和葉は必死に看病した。

ビビビビビビビビビビ

「えっと・・・八度七分!？」

「アカン・・・熱が上がってしもった。」

なんでやろ・・・。

さっきまで元気やったのに・・・。

「新一!薬買ってきたよ!」

蘭は近くのコンビにまで風邪薬を買いに行ったのだ。

和葉は急いで平次に飲ませようとした。

しかし・・・平次は口を開けなかった。

「服部、口開ける!」

蘭は和葉に小さな声で言った。

『口移しで飲ませたら?』

和葉は真っ赤な顔して

平次を見つめた。

平次に口移しやなんて……。

けど、平次……苦しそう。

どないしよう。

「しゃーねーなあ……口移しして飲ませるか。」

「！」

アカン……それじゃあ。

平次のファーストキスが工藤君になってしまうやないか！

いやや、そんなのいやや！

「待つて……工藤君。」

「あん？」

「私が……やる。」

和葉はコップの水に薬を溶かした。

そして口に含む

「平次……ごめんなあ。」

和葉の唇は平次の唇と重なる。

ゴクン……。

平次は薬を飲んだ。

「よかった……。」

ボタンツ

「和葉ちゃん！」

和葉ちゃんまで倒れてしまった。

おそらく服部の風邪が移ったんだろう。

「お疲れ……和葉ちゃん。」

俺は静香さんに頼んで和葉ちゃんを布団に寝かせた。

和葉ちゃんはぐっすり寝てた。

それにしても……服部。

お前はいいよなあ。

ファーストキスが和葉ちゃんです。

パッ

いきなり明るくなった。

電気が点いたのだ。

「静香さん……。」

「あら、新一君に蘭ちゃん。」

「そして……あなた。」

「上野くれはです。」

「大事な話があります。」

空には星が出ていた。

きれいな星達は俺等を見守ってくれていた気がした。

\*9 「口移しやて！」（後書き）

こんにちは

何話で完結するかも分らないです^^；

なんとまたまたキスねたですよ。

いや、あのですね。

新一のファーストキスは蘭じゃなかったの。

せめて平次は！と思いまして^^

蘭のファーストキスはコナンだし（\* m ）ププッ

この後見事にラブラブ・・・とはいかなかったり。  
けど、最後はハッピーエンドですよww

実は、次の連載のプロローグだけできました。

コナンと哀のお話です。（コ×哀ではないです。）

シリアスにしたいなあ・・・なんて思います。

「罪人」の続編？かな？題名少しかぶってるし^^

それでは、みなさん。

評価をよろしく願います。

\* 10 「お願いや」

「えつと……。」

新一は悩んだ……。

どういえば分かってもらえるだろうか……。

「くれはさんは……服部との婚約をどう思ってますか？」

「それはもう嬉しいばかりです。」

「はぁ……。」

くれはさんには婚約する気があるらしいな。

「けど、平次さんは私と婚約する気が無いみたいです。」

「そりゃそーだろーなー。」

服部には和葉ちゃんがいるし。

「上野さん、平次は恋愛に鈍いんや。」

「そーだそーだ。」

「僕、思ってます。服部は和葉ちゃんが好きなんです。」

「そりゃちゃうで。」

「服部のお父さん！」

「あいつは和葉ちゃんのことを子分だと思ってるんや。」

あちゃー……。

あいつまだそんなこと言ってるのかよ。

「違います!!」

「蘭……?」

蘭は大声で言った。

「和葉ちゃんが、遊園地で人質になった時、服部君は和葉ちゃんを助けたわ!」

そうだな。

オタクから和葉ちゃんを取り戻したからな。

好きだからこそ頑張って取り戻せたんだ。

「けどな、蘭ちゃん。あいつはアホや。」

アハハ……。

ちゃんと分かってるなあ。



「和葉ちゃんを好きって自覚できてへんなら……。」

和葉ちゃんじゃない人でもいいってことか……。

「待って……下さい。」

「和葉ちゃん！まだ起きちゃだめ！」

「平気や、蘭ちゃん……。平次のお父ちゃん。」

「なんや？」

「平次は……婚約する気なんてないんや。」

「……。」

「私は……平次が好きや。」

和葉ちゃん……。

「お願いします！くれはさん、平次を諦めて下さい！」

「……和葉ちゃん。」

「私は、平次さんを諦める気なんてありませんわ。」

「そんなあ。」

「平次さんが、和葉ちゃんを好きって自覚したらね。」

「・・・分かった。」

「和葉ちゃん・・・。」

「私、頑張るからな。」

「楽しみにしていますわ。」

和葉ちゃんは部屋に戻った。

熱がまだ下がってないのだ。

「新一君達も疲れたやろ、部屋用意したからそこで寝てや。」

「は、はい・・・。」

俺は何もできなかった・・・。

服部の役に立てなかった・・・。

「新一。」

「蘭？」

「新一・・・自分が役に立てなかったとか思ってるんじゃない？」

「えっ？」

「図星だし・・・。」

「新一は役に立ったよ、だって・・・。」

「だって?」

「服部君と和葉ちゃん・・・キスしたのよ。」

そっちかよ・・・。

「だから・・・ねっ。」

ねっ・・・って。

「もう、寝ようよ。おやすみ新一。」

「おやすみ。」

俺は電気を消した。

けど、服部のお父さんはおかしい。

服部の性格を分かってるはずだろ。

なら、鈍いトコだって分かるだろ。

この話・・・裏がありそうだな。

まあ、とりあえず今日は寝よう。

**\*10 「お願いや」(後書き)**

こんにちは。

もう最終話が出来てしまいました。

なんか、前作の方がよかった。

今回は微妙に・・・。

評価お願いします。

\* 1 1 「俺の推理や」(前書き)

タイトル失敗

\* 1 1 「俺の推理や」

チュンチュン

小鳥のさえずりが聞こえる。

もう・・・朝や。

早お起きなアカンなあ。

「ん・・・。」

まだ・・・熱があるのだろうか。

いや・・・もう寒くない。

頭も痛くない。

治ったんや。

トントントントン

「・・・。」

オカンの包丁の音か・・・？

朝食やるか・・・。

俺は下に降りた。

「…………ん？」

「…………。」

「和葉！？」「

和葉が寝ていた。

ハアハアと息を切らしながら

顔を真っ赤にしながら

「和葉！？」「

「大丈夫、薬を飲ませたから。」

「えっ？」「

「まあ、服部君の様に口移しじゃないけどね。」

「はっ？」「

「和葉ちゃん……服部君に口移しで薬を飲ませたんだよ。」

「…………ねーちゃん。冗談はよせや。」

「いや、冗談じゃねーぞ服部。」

「工藤…………。」

じゃあ……。

俺の熱が下がったのは和葉のおかげか……？

和葉が……俺に薬を飲ませたから

□移しで……ん？

□移し                   ！？

「□移し！？」

工藤とねーちゃんは笑って頷いたんや。

「あら、平次さんおはようございます。」

「あつ……上野さん。」

上野さんは片手に包丁持ってる。

さっきの音は上野さんやったんや……。

「熱下がってよかったですね。もう少しで朝食が出来ますよ。」

「は、はあ。」

「新一さんに、蘭さんも待っててくださいね。」

「ありがとうございます。」



「私も手伝いましょうか？」

「いえいえ、のんびりしてて下さい。」

上野さんは朝食を作ってる。

「服部、話がある。」

「ん？なんや？」

「お前の部屋で話したい。」

「分かった……。」

工藤の奴……あらたまつてなんや？

（平次の部屋）

「この話、裏があると思わないか？」

「ちやうちやうー！俺と和葉はそーいうんとちやうつてー！」

「あん？俺はくれはさんのこと言ってるんだよ！」

「なんや、上野さんか……ってえっ！」

「イキナリ婚約者ですだなんて変だぜ。」

そりゃそーやけど。

「それにお前はまだ分かってないみたいだけど。」

「？」

「お前は。」

「……」

「う……。」

「和葉ちゃん、まだ寝てていいよ。」

「ええよ、じゃあ平次と工藤君呼んでくるで。」

「ちょ！和葉ちゃん！」

タンタンタン

階段のリズムよく上がる

まだ熱いけど

平次の顔を見たい。

恋しい……。

「お前は和葉ちゃんが好きなんだろ？」

えっ……？

平次の部屋の中から声がした。

工藤君の声や。

平次が私を好き・・・？

まさかなあ・・・。

「・・・そやったらどないしよう。」

えっ？

「もし俺が和葉を好きやったとしたらどないしよう。」

「それは・・・くれはさんに言うんだな。」

「なんてや？」

「俺は和葉が好きなんやってな。」

「~~~~！？」

なに言ってるん工藤君！

「さて、話を本題に戻すぜ。」

「ああ、俺もそう思ったところや。」

助かった・・・。

心臓バクバクいつてる。

アカン……。

もう下に降りなな。

タンタンタン……。

さつきより

和葉の足音は静かだった。

「つまり、服部と和葉ちゃんをくっ付ける作戦なんじゃねーか？」

「そりゃ違うで、工藤。」

「あん？」

「あの親父が手伝うと思うか？」

「それは……。」

確かに……。

そうは思えない。

だが、なんかおかしい。

なんか……引つかかるんだよなあ。

「新一！服部君！ご飯だよー！」

蘭の声だ。

俺等は下に降りた。

服部は和葉ちゃんに小さな声で

「かんにんしてや。」

って言っていた。

寂しげな表情を浮かべる服部に

俺は何をしてあげられるだろう……。

**\* 1 1 「俺の推理や」(後書き)**

明後日あたりにでも完結させようかな・・・。

なんて思ったりもしたりして。

完結はひどいですよー。

前作のよりもひどいひどい

とりあえず評価お願いします。

\* 1 2 「不幸やあ！」（前書き）

今日で完結させていただきます。

\* 1 2 「不幸やあ！」

和葉が寝ている中

俺等にご飯食べてたんや。

客が来るとは思ってもいなかった。

ピンポーン

「ん？誰や？」

「オカン、俺が出るさかい。」

「そやったら早お出な。」

「分かつとる。」

俺は走って玄関に向かった。

ガラッ

「！？」

「平次・・・遅いなあ。」

「何やってんだよ、服部。」



「何かあつたんじゃ・・・。」

「うぎゃあああああああー!!」

「!？」

服部の叫び声だった。

何かあつたんじゃないかと思い

急いで玄関に向かった。

「服部！」

「服部君!？」

「平次!？」

いつせいに声を出す。

しかし、平次は無事だった。

なぜか口をあんぐり開けている。

「不幸や・・・。」

外にいるのは・・・!!

「こんにちは。」

「宮野!？」

外に立っていたのは

宮野志保だった。

冷やかな顔でこっちを見てきた。

「あら、あなたもいたのね。」

「・・・あのなあ。」

志保は平次に手紙を渡す。

「さっき、男の子から預かってきたのよ。」

手紙の裏には『遠山和葉様』と書かれてた。

そして、『金山純』という宛名も書かれていた。

「かわいい子だったわよ。」

「これって・・・なんや？」

「あら、あなたそんなのも分からないの？」

相変わらずきついなあ。

「ラブレターよ。」

「……………」

「あら？恋文って言った方がよかったかしら？」

「なんやてええええ！？」

「和葉ちゃんにラブレター！」

「服部君、ピンチじゃない！」

「落ち着きなさい、まだそう決まった訳じゃないわ。」

「ほんまか？」

「けど、恥ずかしそうに私に手紙を託していったわ。」

「……ラブレターやないか。」

「どないしようか……。」

「選択肢は三つや。」

「一 上野さんと幸せになる。」

「二 和葉と幸せになる。」

「三 二人以外と幸せになる。」

「どれや……。」

二が一番ええかもしれない。

けど、こんなはつきりしてないのに

和葉を幸せにできるのやろうか。

「どうする？和葉さんを取られちゃうわよ。」

「和葉は渡さへん。」

俺は強くそう言った。

和葉が好きかどうかはともかく

和葉は渡さへん。

「・・・そう、そういつてくれて嬉しいわ。」

俺はみんなを玄関に残して和葉のトコに行った。

和葉の顔が見たかったのだ。

「スースー。」

和葉の奴、可愛い寝顔しやがって。

「和葉・・・早お元気になるんやで。」

「・・・純。」

「へっ？」

「・・・純。」

「・・・。」

純・・・？

まさか・・・ラブレターの相手。

『金山純』

うそやろ・・・和葉。

和葉は・・・その純って奴が好きなんか？

なんとか言えや・・・。

和葉！！

**\* 1 2 「不幸やあ！」（後書き）**

こんにちは。

来週になったら、もう投稿どころじゃなくなりそう。

なので、今日中に完結させます。

頑張ります。

**\* 1 3 「大喧嘩や」(前書き)**

大喧嘩なの・・・かな？

**\* 1 3 「大喧嘩や」**

なあ、和葉。

俺はお前といると楽しいで。

けど、お前は違うんか？

和葉・・・。

「ん・・・。」

和葉は寝返りをうつた。

「平次・・・。」

「和葉・・・平気か？」

「ありがとお、もう平気や。」

よいしょと言って起き上がる。

和葉は笑顔で平次に言った。

「熱、下がってよかったなあ。」

「ああ・・・。」



□移して薬を飲ましてくれた和葉のおかげだ。

「・・・□移し。」

「えっ？」

「ホンマか・・・？」

「・・・う。」

和葉はたこみたいに顔を真っ赤にした。

「で、なんか用でもあるん？」

「・・・これ、お前宛やで。」

『金山純』からの手紙を渡す。

「・・・ラブレターみたいやで。」

「んなアホな。」

「お前・・・純って奴が好きなんか？」

「へっ？」

「寝言で何回も純って言ってたで。」

「何言ってるん？」

「本当や！」

平次はイキナリ怒鳴った。

「怒鳴ることないやんか！」

「ホンマやで！ホンマに純って言ってたで！」

「だからなんや！」

「なんやその言い方！」

「だって、平次が怒るから。」

「うるさい！お前はその純って奴とお幸せにいー！」

「もぉええ、平次はくれはさんとお幸せに！」

・・・本気か？

昨日は行くなとか言ってたやないか。

大ウソツキ。

和葉の・・・アホ。

「ホンマに上野さんと婚約するで！」

「どうぞご勝手にー！」

・・・もおええ。

和葉は俺のことなんか好きや無かったんや。

ちつとも・・・。

ガラッ

「平次、どないしたん？」

「オカン・・・みんなを集めてくれ。」

俺はみんなを集めた。

工藤やねーちゃんやきつついねーちゃんと

オカンと上野さん

そして・・・和葉。

「みんなに話そうと思ってな。」

後悔・・・しない。

絶対・・・。

「俺、婚約するで。」

「へっ・・・。」

「はっ  
・  
・  
・  
・  
・  
」

「ふつ・・・」

「ええええええええええ！！！」

みんなが声を上げた。

そりや驚くだろう。

あんなに婚約をいやがっていた男が

イキナリ婚約するだなんて。

「本当ですか、平次さん？」

「ああ、ほんまやで。」

「おい、服部！！」

「うそでしょ、服部君！！」

「平次・やつとその気になつたんやな。」

「ああ、待たせてスマン……オカン。」

和葉の方は見れなかった。

もう……ええ。

俺は・・・和葉が好きや。

けど、気づくのが遅かったんや。

和葉は俺が好きやなかったんや。

これでいいんや。

解決やないか。

・・・。。。

「平次・・・。」

・・・見るな。

和葉・・・見るな。

お前の顔見ると・・・。

決心がつかないやないか。

アカン・・・。

苦しい・・・。

すごく苦しい・・・。

「じゃあ、婚約パーティは明後日にでもするで。」

オカン・・・気が早いなあ。

まあ、早く婚約してしまおう。

和葉を諦めよう。

和葉は・・・純って奴と

幸せになつてくれれば

それでいいんや。

**\* 13 「大喧嘩や」 (後書き)**

またまた投稿します。

ああ、忙しい。

評価お願いします。

\* 14 「すれ違いやな」(前書き)

ああ・・・駄作だあ。



\* 14 「すれ違いやな」

私は、平次の家を後にした。

平次は私と顔を合わせようとなんてしなかった。

志保さんは

『大丈夫、彼を愛してるのでしょぅ？なら彼を信じなさい。』

そう言った。

「……………」

私は自分の家に帰った。

ガラッ

「ただいま……………」

「おっ、和葉。おかえりい。」

お父ちゃんの笑顔を見たら

なんだか安心出来た……………」

ポロッ……………」

「……………」

泣いてしまった。

子供の様に

声を上げて泣いてしまった。

「和葉・・・なにがあつたんや？」

「・・・実は。」

私は今までの出来事を全部話した。

もちろん、口移しは内緒やけど。

「そりゃ、平次君も怒るで。」

「なんでや？」

「そりゃ、知らない男の名前を寝言で言ってたらなあ。」

「それなんやけど・・・。」

俺は一人でヒマワリの園に向かった。

・・・一人で行くなんて。

なんて思いながらもベンチに座った。

「ここで・・・初恋の人を暴露したなあ。」

そう、ここで和葉が初恋の人だと言った。

月明かりの下で・・・。

もう・・・和葉は横にいない。

いるのが当たり前やったのに。

「っ!」

涙は出ない。

だが辛い。

すごく辛い。

寂しい。

すごく寂しい。

俺には・・・和葉がいなきゃ駄目なんや。

今頃自覚してしまった自分が情けない。

情けないで・・・。

「まるたけえびすにおしおいけえ　よめさんろっかくたこにしきい

」

平次は歌った。

一人ただ寂しく……。

初恋の少女が自分に残した歌を歌った。

もう……戻れない。

もう……駄目だ。

……。

『平次？』

『平次いー！』

『平次……。』

……違う！！

俺は高校生探偵やで！

こんなんで諦めるなんておかしいやないか！

……けど、どないしよう。

婚約パーティは潰すつてもなんかなあ。

・・・そや!!

いいこと考えたで!!

平次は走って家に帰った。

「なに？それは本当か、和葉。」

「平次は勘違いしてるんや。」

お父ちゃんに言ったらすつきりしたで。

「・・・そや、いいこと考えたで！」

「なんや、お父ちゃん？」

「耳貸してや。」

ひそひそ・・・。

「それはええ！ありがとお！」

私は家を飛び出した。

平次の誤解を解きたかった。

解きたかった。

そして・・・もう一度

平次の胸で泣きたい。

『あなたの下に戻れてよかった。』

そう言いたい。

平次！！

会いたい・・・。

会いたい！！

**\*14 「すれ違いやな」(後書き)**

作者「こんちゃ!」

新一「うわぁー後書き適当じゃん。」

作者「うるさい!!」

新一「は・・はい。」

作者「それではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

\*15 「プレゼンテーション」(前書き)

ああ・・・題名が・・・。



\* 15 「プレゼントやて？」

俺は部屋に戻った。

そして、前買ったラブラブストラップを

机の奥から出した。

そして、それをポケットに入れて

和葉の家に行こうとした・・・。

トントン

「誰や？」

ガチャ

「・・・和葉さんのところに行ってしまうのですね。」

「上野さん・・・。」

「気づいていました。あなたが婚約すると言ってくれたのは嬉しいかったです。」

・・・スマン、上野さん。

「けど、その時のあなたの顔は寂しげでした。」

「俺・・・スマン!!」

ギュッ

くれはは平次の手を握る。

「頑張つて下さい・・・平次さん。」

「おおきに・・・上野さん。」

バンッ

俺はおもいつきりドアを開けた。

ダダダダダ

階段を駆け降りる。

「服部!!」

新一は平次を呼び止めた。

「なんや、工藤か。」

「・・・これ、俺の母さんから。」

「えっ?」

工藤は俺に白い箱をくれた。

中身は……。

「タキシード……？」

黒いタキシードだった。

結婚式で着る様な立派な物だ。

「二人の仲が進展します様にだつて。」

「……サンキューな。」

「それと、宮野から……和葉ちゃんへつて。」

また白い箱だ。

中はまだ見ないでおこう。

「……なあ、工藤。」

「あん？」

「俺は……和葉が好きや。」

「いや、知ってたし。」

「なんでや!!」

俺、そんなこと言ったか？

なんでや!?

「・・・見てれば分かるよ。」

「へっ?」

「お前ら・・・俺達に似てるよ。」

「工藤・・・。」

「頑張つてこいよ、服部。」

「ああ!」

パンツ

二人は手を叩き合った。

そして、服部は行った。

目をキラキラさせて・・・。

後ろには

優しく微笑む

くれはさんがいた。

「くれはさんに聞きたいことがあります。」

「あら・・・あなたにはばれていたのですね。」

「もう、その話し方・・・やめたらどうですか?」

「・・・そやな。」

「この婚約はうそですね。」

「・・・なんのためやと思う?」

「二人をくっ付けるために。」

「正解や。」

「あなたのおかげでもありますし。」

「あの二人自身の力のおかげでもある。」

「くれはさん・・・。」

「なんや?」

「あなたは・・・服部のこと。」

「好きやったかもしれせん。」

「・・・そうですか。」

「けど、まさか平蔵さんまで協力するとは思いませんでした。」

「僕もです。」

くれはさんはまた微笑む。

「平次さんが婚約すると言った時は焦ったで。」

「僕もです。」

「作戦失敗になるとこやったもん。」

「あいつ・・・鈍いといふかなんていうか。」

くれはさんは笑ってた。

それにしても・・・

くれはさんはどこから来たんだ？

\* 15 「プレゼントやて?」(後書き)

作者「こんにちは!」

志保「ところで、新連載はいつからかしら?」

作者「えと・・・落ち着いたらです。」

志保「哀が出るのよね。」

作者「その通り。」

志保「まあ、せいぜい頑張りなさい。」

作者「は・・・はあ、それではいつもの決め台詞!」

二人「真実はいつも一つ!」

\* 16 「再会できたな」(前書き)

ああ・・・忙しい。



\* 16 「再会できたな」

平次・・・好きや。

平次・・・ごめんなあ。

けど、誤解なんや。

純って言ってたのは・・・。

誤解なんや。

私は玄関の戸を開けた。

走った。

平次の家まで走った。

ここを曲がれば平次の家や！

バンッ

「いた・・・。」

誰かとぶつかってしまった。

「ごめんなさい！私・・・！？」

「和葉・・・。」

「平次……。」

私達はヒマワリの園に向かった。

「……なあ、平次。」

「……。」

「平次？」

「あつ、すまんすまん。それよりこれ。」

平次は私に小さな袋を渡した。

中は……。

「これ……ラブラブストラップ!？」

「そやで。」

「……じゃあ、平次……。」

「俺は……和葉のこと。」

ドキドキドキドキドキドキドキドキ

「……和葉のこと……。」

ドキドキドキドキドキドキドキドキ

「・・・す・・・す・・・。」

「もおええ。」

「へっ？」

「言わなくても・・・分かるで。」

「和葉・・・。」

「私・・・平次が好きや。」

「えっ・・・。」

「大好きやで。」

「・・・それ、ホンマか？」

「ホンマやで。」

夢やろか・・・。

和葉も俺が好きやなんて。

うそやろ・・・。

「・・・それと、純のことやけど。」

「ああ・・・。」

「純って・・・後輩やで。」

「へっ？」

「金山純ちゃんや。」

「ちゃん・・・？」

「女の子や!!」

「はぁ!？」

後輩の女の手紙のために

俺はこんなに悩んでたのか？

アホや・・・。

「俺・・・アホやな。」

「なあ・・・平次。」

「ん？」

「平次からもなんとか言つて。」

「へっ・・・。」

「その・・・。」

アカン・・・！！

これって告白しろってことか！？

そんな！？

「す・・・す・・・す・・・。」

「す？」

「す・・・す・・・す・・・。」

「お前が・・・好きや。」

「よくできました。」

和葉は俺の横に座った。

やっぱり・・・俺には

和葉がいなきゃ駄目なんや。

好きやで・・・和葉。

**\* 1 6 「再会できたな」(後書き)**

中学生は忙しいなあと実感中の奈津美です。

**\* 17 「婚約パーティー！」（前書き）**

**次回で最終話です。**

＊１７ 「婚約パーティーや！」

婚約パーティー当日

俺はタキシードを身にまとった。

上野さんにも頼んだ。

婚約パーティーの間に

サプライズを用意したのだ。

それに協力して欲しい。

そう頼んだのだ。

「それでは、平次とくれはさんの入場です。」

ジャジャジャジャー

おいおい・・・オカン。

これは結婚式やろ。

俺は上野さんと入場した。

っていつても俺の家やし

ただの居間やけどな・・・。



「あなたはくれはさんと婚約することを誓いますか？」

・・・誓う訳無いやろ。

俺は和葉が好きなんやから。

「誓い・・・ま。」

ガラッ

来た！！

「平次！行くで！！」

志保からもらった

ピンクのウェディングドレスを身にまとっていた。

「ああ！！」

二人で逃げるで、和葉！

くれはさんは笑顔でよかったなの一言。

「待てや、平次！誓いま・・・まで言ってたやないか！」

「・・・オカン、俺は誓いませんって言おうとしたんやで。」

そっぴい残して

俺と和葉は逃げた。

「静香さん、作戦は成功したで。」

「お疲れ様、くれはちゃん。」

「お疲れさん。」

「ありがとうお平蔵さん。」

「ありがとうなあ。」

「遠山さん！」

「久しぶりやな、くれはちゃん。」

「遠山さん！」

作戦は大成功。

つまり、この五人で考えていた計画は

大成功をおさめたのだ。

蘭は一人分かってなかった。

宮野は分かっていたらしい。

おめでとう・・・服部。

ほら・・・空は笑ってるみたいだぜ。

雲ひとつない空を新一は見上げた。

ヒマワリのが見守る中

二人だけの婚約パーティが行われる。

「遠山和葉さん、あんたは俺と婚約してくれることを誓うか？」

「もちろん・・・平次は？」

「誓うに・・・決まっとるやないか。」

「ホンマ？」

「ああ。」

「夢じゃないよね。」

和葉は涙をこぼす。

「夢じゃないで。」

二人は小さくキスをした。

そして・・・見つめ合った。

「・・・みんなに感謝せなアカンな。」

「平次が鈍いからやで。」

「なんやそれ！」

「ホンマのことやないか！」

二人はいつもの様に口げんか。

いつもとは違う口げんかだ。

平次はタキシード。

和葉はドレス。

そして、ひまわりに囲まれた

微笑ましいといってもいいかもしれない

口げんかだった・・・。

\* 17 「婚約パーティー！」（後書き）

作者「こんちゃ！」

蘭「こんにちは。」

作者「いやー短かったよお。」

蘭「なんか・・・手抜きじゃない？」

作者「いや、頑張りましたよ。」

蘭「真実はいつも一つ！」

作者「ええ！勝手にやってるし！」

蘭「あれ？いけなかったの？」

\* 18 「未来や」

（5年後）

「・・・蘭ちゃん、おかしくない？」

「平気よ、とっても素敵だもん。」

「ならええけど・・・。」

和葉はあのピンクのドレスを着ている。

蘭がメイクをしてあげる。

みるみるうちに可愛くなっていく和葉を見て

蘭はニコツと笑った。

「・・・平次と結婚できるなんて。」

「そうね、私も夢見たいだったもの。」

蘭たちは三年前に結婚式を終えた。

子宝にもめぐまれて

素敵な生活をおくっているそうだ。

「かずはちゃん、かわいいよ。」

「ありがとな、鈴ちゃん。」

鈴というのは蘭と新一の間に生まれた子供だ。

蘭と関連のある名前だ。

鈴と蘭を合わせれば

『すずらん』になるからだと思つた。

トントン

「和葉・・・開けるで。」

「ええよ。」

ガチャ

平次は黒いあのタキシードに身をまとう。

「・・・綺麗や。」

「恥ずかしいやないか、そんなこと言われると。」

二人はとても幸せそうだ。

新一は蘭の横に行った。

「あの二人ならやっていけるな。」

「そうね。」

「こんにちはー！」

「くれはさん・・・。」

くれはさんは平蔵の親友の娘なのは事実。

更に新たな事実が分かった。

なんと、新人刑事だったそうだ。

それにはみんな驚いた。

客席には

少年探偵団のみんなと園子

博士に志保に毛利夫妻。

そして、工藤夫妻。

もちろん結奈と裕也もいた。

そして・・・俺と蘭も。

仲人は大滝さんだった。



「そつそつそーれでは、新婦新郎の入場ででです。」

アハハ、大滝さん緊張してる。

服部・よく頑張ったな。

おめでとう。

ジャジャジャジャー

ジャジャジャジャー

ジャジャジャジャー

ジャジャジャジャー

二人は笑顔で入場してきた。

「なあ・・・平次。」

「なんや？和葉。」

「今・・・すつごく幸せやで。」

「そつか・・・。」

「平次は？」

「俺は・・・。」

今までいろいろあつたけど

本当にここまで来たんだなんて

考えていた。

上野さんやオカンや親父や

工藤やねーちゃんやみんなのおかげでもある。

みんながいなかったら

ここまで来れなかったかもしれへん。

ありがとう・・・。

ホンマに感謝してるで

「和葉。」

「ん？」

「俺も・・・すごく幸せやで。」

「ありがとう・・・。」

「それと・・・。」

「それと・・・?」

「大好きや・・・。」

「私もや・・・。」

真上の窓から空が見えた。

雲一つ無い晴天だ。

なんて綺麗な空だろう・・・。

俺が今まで見てきた空で

一番綺麗な空やで・・・。

Congratulations  
heiji  
and  
kazu

完

h  
a

\* 18 「未来や」(後書き)

奈津美です。

みなさんにはいろいろとご迷惑をかけまして・・・。  
一日で役10話を投稿するだなんて・・・。

評価やアドバイス欲しいです。

次回作についての意見も沿えてくれると幸いです。

なんか、完結微妙でしたね。  
反省しております。

みなさん、ご愛読?ありがとうございます。  
そして、これからもよろしく願いします!

2006 9 30(土) 17:05

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9700a/>

---

ライバルは婚約者！？

2010年10月15日12時29分発行